

# 関堀の獅子舞



関堀の獅子舞は、宇都宮市の中心部より北約4kmに位置する、豊郷地区関堀町の関沢観音堂で行われている獅子舞です。

獅子舞の由来は、言い伝えによると、平安時代の天喜5(1057)年、八幡太郎義家(はちまंतरろうよしいえ)が、奥州平定の命を受けた折、紫宸殿(ししんでん)において当時宮中で悪霊退散・国家安泰を獅子舞で祈祷する任にあっていた藤原角輔に門出を祝福させました。

奥州を平定し、京都へ引き上げる途中、義家はこの獅子舞を現在の関堀にあたる関沢の地に残し、それが代々受け継がれたものといわれています。

紫宸殿獅子舞藤原角輔流を名乗るこの獅子舞は、昭和45年に宇都宮市無形文化財に指定され、現在は地域の人々により、関堀獅子舞保存会が結成されています。

# 関堀の獅子舞

関堀の獅子舞は、以前はお盆の8月14日・15日・16日の3日間行われていましたが、近年は、8月14日・16日の2日間で行われています。

この獅子舞は、笛の音に合わせて、腹に付けた小太鼓を打ち鳴らしながら、太夫獅子(たゆうじし)・中獅子(なかじし)・雌獅子(めじし)の三匹が勇壮に舞います。

これは、一匹ごとに一人が入って三匹で踊る、「風流系一人立三匹獅子舞(ふりゅうけいひとりだちさんびきししまい)」といわれるものです。

## 8月14日

早朝、「獅子の宿」として、獅子舞用具を保管してある保存会長宅で準備を整えます。

引き続き、農民が自衛のために杖を用いた技が芸能化した「棒術」が行われます。

二人が、太刀と棒をそれぞれに持ち、わたりあう「棒術」は、獅子舞を奉納する舞台を清める役割を果たすものです。

「棒術」に続き、獅子達が「弓くぐり」の前半部分を舞います。

舞が終わると、敷地内にある氏神＝シンメ様にお参りをして、行列をつくり、笛の音に合わせて観音堂を經由して、中宿である郡司家に向かいます。

中宿でも、棒術と舞(弓くぐり)が行われ、初日の奉納が終わります。

地元では、この日の一連の流れを「引越し」と称しています。



8月16日夕方

中宿に2泊した獅子たちが、観音堂において舞を奉納します。

### 「ろくぐりの舞」

この舞は、獅子が弓をくぐり抜ける舞です。

まずは、棒術が披露され、その後舞が奉納されます。

獅子は、弦が張られた僅かな間をくぐり抜けることができるか、頭を入れる、長い時間弓の前で試行錯誤を重ねた後、最後に意を決して弓をくぐり抜けます。

太夫獅子、中獅子の順に弓をくぐり抜けます。

### 「剣の舞」

この舞は、獅子が口にくわえた真剣で竹を切るのが特徴です。

弓くぐり同様に、棒術が披露された後、舞が奉納されます。

途中で獅子達は、鳥の羽根のついた丹尺(たんじゃく)を振りながら舞い、悪霊払い・五穀豊穰・無病息災などを祈願します。

終盤には、太夫獅子が真剣をくわえて舞った後、立てかけられた竹を一気に切ります。

この竹は、最後に細かく切り分けられ、お守りとして配られます。

奉納が終わると、中宿の氏神様にお参りし、隊列を組んで、獅子の宿である保存会長宅に戻って、その年の獅子舞が終わりとなります。

